ななおの彩り①

万葉紀行(上)

自然、歴史、文化、伝統……。新しい七尾市には、日本のよさが変わらず残っています。そんな七尾のよさを求めて市内巡りをしてきました。

香島より
熊来を指して
漕ぐ舟の
楫(かじ)取る間なく
都し思ほゆ
(『万葉集』巻十七 四〇二七)

万葉を代表する歌人のひとり大伴家持が越中国司として、天平二〇年(七四八年)春、出挙(すいこ)のため、国庁のあった今の高岡市伏木を出発、馬と船とを使い能登(当時、能登は越中国に属していた)を巡行したおり、香島津(七尾港付近)を出て、熊来(中島地域)へ向かう船の中で詠んだ歌といわれています。

現在の七尾港は港湾整備され、海岸線の位置もかなり海側へ移ってきているため当時を偲ばせる姿は残っていません。かわって、能登食祭市場やマリンパークが観光客でにぎわい、市民に親しまれている親水空間としての姿やヨット、ボートなどによるマリンスポーツを楽しむ姿を見ることができます。

爽やかな秋空の下、万葉の時代に思いをはせ、香島津(能登食祭市場)から船を出すことにしました。

季節は違いますが(家持が訪れたのは早春であろうと思われます)、家持が熊木へと渡ったであろう船路を行くと、波穏やかな内海に浮かぶ緑豊かな能登島、変化に富んだ海岸線が万葉の情景を思い浮かばせてくれます。

七尾港へ出てしばらく進み、家持が七尾へ着いたであろう方角(家持は高岡から羽咋へ出、能登部から七尾へ来たといわれています)を望むと、当時と同じであろう城山を含む石動山系の山々が創りだす尾根の連なりと、邑知地溝帯の広がりを見ることができます。

さらに、青い空、陽光にきらめく海、家持も愛でたであろう七尾湾の美しさは時を忘れてしまうほどで、家持が都のことを思い出し恋しがったのは、都に残した妻にもこの景色を見せたいと考えたからでは…などと思わせてくれます。

七尾湾の景観は、日本海の荒海に創られた外浦の男性的な荒々しい景観と対照的に、穏やかな内海の波に創られた女性的な優しい姿をしているといわれています。

アイの風に吹かれながら船路を進み、石崎漁港に並ぶ漁船の姿、その奥に黒い能登瓦が並び日に照らされ輝く姿を見送ると、新七尾市を結んだ能登島大橋の勇壮な姿を下から眺めるという不思議な感覚を味わうことができました。

七尾湾は、能登島大橋あたりを境に南湾と西湾に分かれています。

西湾に入ると、突然、波の高さや速さが変わり同じ七尾湾でも海の表情が違うと驚きつつ船に揺られていくと、眼前には和倉温泉の姿が近づいてきました。

伝承によれば、和倉温泉は大同年間に「湯の谷」が噴出したのが始まり(平成十八年に開湯千二百年記念行事が開催予定)とされていますので、家持が巡行した時(千二百五十五年前)には和倉温泉はまだなかったはずですが、波が高くなってきたので少し寄り道をしてみることにしました。